三島由紀夫
対談集
源泉の感情

河出書房新社

源泉の感情——三島由紀夫対談集

定価　六八〇円

昭和四十五年十月三十日初版発行
昭和四十五年十二月十五日四版発行

著者　三島由紀夫
装幀者　秋山　正
発行者　中島隆之
印刷者　多田　基

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三の六
電話東京二九二局三七一一
振替口座　東京一〇八〇二

Yukio Mishima © 1970

0095-037023-0961

目次

美のかたち　小林秀雄　5
—『金閣寺』をめぐって—
現代作家はかく考える　大江健三郎　25
大谷崎の芸術　舟橋聖一　47
二十世紀の文学　安部公房　59
☆　☆
新人の季節　石原慎太郎　93
エロチシズムと国家権力　野坂昭如　107
文武両道と死の哲学　福田恆存　119
ファシストか革命家か　大島渚　147
七年後の対話　石原慎太郎　177
☆　☆
演劇と文学　芥川比呂志　189

劇作家のみたニッポン　テネシー・ウィリアムズ　205
歌舞伎滅亡論是非　福田恆存　219
捨身飼虎　千宗室　229
☆　☆
日本の芸術
歌舞伎　坂東三津五郎　240
新派　喜多村緑郎　252
能楽　喜多六平太　266
長唄　杵屋栄蔵　279
浄瑠璃　豊竹山城少掾　292
舞踊　武原はん　303
あとがき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

源泉の感情

――三島由紀夫対談集

小林秀雄　美のかたち

――『金閣寺』をめぐって――

三島由紀夫

動機小説・抒情詩

小林　久しぶりで読んだな。小説を、ずいぶん読まなかった。

三島　小説ってもの、まだあるのか、なんてね。(笑)

小林　やっぱり、あれ(『金閣寺』のこと)は、毀誉褒貶こもごも至るというやつだろうなあ。

三島　……。(笑)

小林　何か、批評っていうことを、しなきゃいけないんですか。雑談でいいでしょ？　まあ、そういうふうなのんきなことにしてもらいましょう。

三島　こんどのご旅行で、金閣寺、ご覧になりました？

小林　それがね、行こうと思ったのよ。こんどできて、とてもきれいだっていうから。それで朝起きたら、どうしたんだったかな、ああ、河盛君がいてね、それで話しこんじゃって、時間がなくなっちゃって、いかなかった。

三島　京都の人はたいへん恥かしがるんですけどね、僕なんか見ると、いいと思うんです。

小林　だって、前とそっくりに造ったんだろう。

三島　ええ。金ピカで、ちょっと夕陽が当ったりすると、眼を射るような……。

小林　あれ、本金かね。

三島　本金らしいです。何か学者の説があってね、上の一層か二層かだけが金塗りで、あとは金じゃなかったっていう説が、初め、あったんですってね。ですけども、途中で全部金塗りだっていうことが解って、計画を変更して、全部塗っちゃったんです。ですから、途中にちょっと白い壁もありますけども、ほとんど金ピカですね。

小林　誰から聞いたんだかな、二千万円でできたんだって？

三島　ええ、二千万円。

小林　安いね。

三島　ほんとに安いもんですね。今、自分の家を建てたって、ちょっと冷房暖房装置をやりゃあ、たちまち二千万円になっちゃう。(笑)ああいうもんだったんだろうなあ、昔のぜいたくっていうのは、きっと。

小林　いつか、金閣焼いた人があるでしょ、あれ調べて書いたの、あなた。

三島　ええ、調べたんですけどね、当人には会わなかったんです。当人の経歴をずっと調べたんです。

小林　また焼いたやつ、いるじゃないの。

三島　ええ、延暦寺。

小林　困るねえ。(笑)ラスコルニコフだね。……ドストエフスキイは、『罪と罰』を書いた時ラスコルニコフがペ

テルブルグに現れたんで、とっても得意だったらしいけども、三島君、得意かね、延暦寺が出てきて。

三島　今に発禁になるでしょう。(笑)あれはね、現実にはつまんない動機らしいんですよ。見物人が来る、若いやつがきれいな恰好してね、アベックで見物に来たりする、それがシャクにさわる、自分は冷飯食わされてて、みじめな格好してるしね、自分の青春は台なしになってしまう。そういうことらしいんです。住職が因業だ、なんていうこともあるらしいんだけど、たいした動機はなかったらしいんですね。

小林　そりゃそうだろうね。三島君のは動機小説だからね、だから、あれはむつかしかったでしょう。ラスコルニコフには、ほとんど、動機らしい動機は書かれていない。やっちゃってからの小説だからね。きみのは、やるまでの小説だ。

三島　本来は動機なんかないんでしょうね、ああいうことをやるやつ。

小林　ないでしょうね。……で、まあ、僕が読んで感じたことは、あれは小説っていうよりむしろ抒情詩だな。つまり、小説にしようと思うと、焼いてからのことを書かなきゃ、小説にならない。つまり現実の対人関係っていうものが出て来ない。対社会関係も出て来ないからね。きみのラスコルニコフは、動機という主観の中に立てこもっているのだから、抒情的には非常に美しい所が出てくるわけだ。僕は、たとえば親父の葬式とか、由良川の所なんか、とてもいいと思いました。僕、由良川って知ってるんだよ。

三島　ああ、そうですか。いらっしゃいましたか。

小林　自動車でズーッといった。あのへんの感じ、とてもよく出てるね。

三島　さみしいとこですね。

小林　さみしいとこだよ。何か不思議な景色だな、あそこんとこ。

三島　夏は海水浴で俗悪になるらしいんですけど、夏以外は全然……。

小林　僕は舞鶴から丹後の宮津へいったからね、その時、妙な印象の川だと思って……。

三島　あの小説は、小林さんのを盗んだ所があるんです。

小林　どうして。

三島　それは小林さんがいつか書いていらしったんで、美というものは人が思うほど美しいものじゃない、決して美しいものでもなんでもないんだっていう、あれがあの中に入ってるんです。

小林　あ、そうかな。

三島　そういう文章も、中に一つ、盗んであるんです。

小林　や、それは知らないけどね。

三島　モオツアルトでしたか、何かお書きになった中の……。

小林　そうでしたか。とにかく、きみのラスコルニコフは、大変な審美家だね。美っていう言葉は妙な言葉だな、美学者がこれを使う様になればなるほど、美の仕事に熱中している人達は、この言葉をいやがる様になるのです。セザンヌなんか決して使ってない、美っていう言葉の代りに、アンタンジテ、強さっていう言葉を使う。美しさとか美って言うのがいやなんだ。

三島　ラスコルニコフは社会主義的犯罪だ、という説があるんじゃないですか。

小林　あります。あの人の中には、美の問題は全然ない。

三島　ありませんね。

才能と天才

小林　美の問題をドストエフスキイが、まともに扱ってくるのは結局、カラマゾフでしょう。イヴァンの弟、ドミトリイね、あれだね。

三島　あの告白の章に、美っていうものは、おっかないもんだ、ということを、しきりに言ってるんですね。

小林　言ってる。美の問題は、ラスコルニコフにはないんだ。あそこでドストエフスキイが、非常に考えたことはね、おそらく初めは主人公のコンフェッションで書こうと思った、それでやろうと思って、草稿もあるんだよ。そいつがダメになったっていうことは、コンフェッションで書けば、結局、小説にならんと思ったんだよ。それでよしたんだね。で、あれは倫理問題なんだけど、結局は一つの倫理的なある観念に憑かれた気違いを書いてるわけでしょ。だから、観念に憑かれた気違いのコンフェッションというようなものは、これは小説にならないんだよ。それで仕方がないから、こんどは外から書いたんだ、リアリズムで書くと、コンフェッションはその主観的な意味を失うことになる。それに、主人公もコンフェッションを頼みにできるのは殺人までだ。殺してしまうと、もう孤独なコンフェッションだけでは生きられない。こんどは世間に生きなきゃならん場合が出て来るわけだろう。そこに小説のモチーフが生れる、というふうに、本能的に考えたわけだな。きみの小説はその逆だ。コンフェッションの主観的意味の強調です、全然。それだからね、あそこにいろいろの人が出て来るけども、あれはあの主人公のコンフェッションの世界

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の中の人だろう。

三島　はあ、はあ、そうです。

小林　あの人がほんとにつきあった人じゃないね。それだから、どう言ったらいいか……。

三島　ドラマが成立しない。

小林　しない。だから抒情詩になるわけだよ。無論、作者はそういう意図で書いたんだと思うんだよ。だから抒情的には非常に美しいものが、たくさんあるんだよ。ありすぎるくらいあるね。僕はあれを読んでね、率直に言うけどね、きみの中で恐るべきものがあるとすれば、きみの才能だね。

三島　……。（笑）

小林　つまり、あの人は才能だけだっていうことを言うだろう。何かほかのものがないっていう、そういう才能ね、そういう才能が、きみの様に並はずれてあると、ありすぎると何かヘンな力が現れてくるんだよ。魔的なもんかな。きみの才能は非常に過剰でね、一種魔的なものになっているんだよ。僕にはそれが魅力だった。あの滾々として出てくるイメージの発明さ。他に、きみはいらないでしょ、なんにも。

三島　ええ、なんにも。

小林　つまりリアリズムってものを避けてね、実体をどうしようというような事は止めてね。なんでもかんでも、きみの頭から発明しようとしたもんでしょ。

三島　ええ。

小林　その才能さ。その才能の過剰だよ。これが面白い。面白いっていうのは、いい意味だよ。僕はだから退屈しなかった、ちっとも。たしかに、きみは人を乗せた、乗せてどんどん運んでいったよ。そういうものの中に、僕は力を認めたね。そういうように感じて読んだんだよ。僕は『潮騒』を読んだ時も、それは感じたけども、今度のほうがもっと豊富で、もっと緻密で、もっとパッショネートだ。自分の才能をとっても愛してるんじゃないのかな。才能を信頼したり愛したりする度がさ、ずっと強いだろう。そういうものがあったな。

三島　才能（タラント）に対する天才（ジェニイ）というもの。ジェニイが自分を愛する、ということはないですか。

小林　そういうふうに言われてくると、解らなくなるんだけど、まあ、僕の感じなんですよ。

三島　モオツアルトの……。

小林　モオツアルトは、あの人の美っていうものは……。

三島　ジェニイというものは、全然自分を愛さないものでしょうか。たとえば、そういう音楽家とか画家とか……。

小林　無意識にものをつくる……。

三島　ええ、ええ。しかし意識しちゃうと、もう愛するようになっちゃうものでしょうか、意識した途端に。

小林　モオツアルトの意識は昔の意識で言葉による意識ではないから。まあ、そういう意識をケルケゴールなんかは官能の無意識と考えたんだ。だから、意識というようなものが出てくると、これは音楽の世界じゃないんだね。やっぱり文学の世界になる。意識は愛ではないが愛は意識だという考えは、これはケルケゴールがまた別に考えた問題です。で、まあ、きみの書いたものね、あれは美の問題ということでなくてもよかったんじゃないの。つまり固定観念に憑かれた男の追いつめられていく径路を、あんたは謳ったわけでしょ。

三島　ええ。ですから、美でなくてもいいんです。全然、美でなくてもいいんです。自然主義の小説なんかは、醜いっていう固定観念に追いつめられた男の小説かな。美という固定観念に追いつめられた男というのを、僕はあの中で芸術家の象徴みたいなつもりで書いたんですけど、ある批評でこういうことを言われたんです。あれは芸術家小説だけども、あの主人公を坊主にしたのはおもしろい、風変りだ、ということを言われたことがあるんです。僕、ちょっとそういうつもりがあったんです。

小林　でも、僕はあれは小説だと思わないんだ。

三島　ええ、ええ、解ります。

禅寺について

小林　小説の定義次第ですけどね。そうなると、いつも困る問題になっちゃうなあ。だから、あの中に出てくる人間だって、妙なビッコの人間だって、それから、あの妙な女だって、あの小説でなんにも書けてもいないし、実在感というようなものがちっともない、そういうのは見方によるんでね、一種の抒情詩みたいなふうに読めば、あれ一つ一つに何か鮮やかなイメージがあるだろう。僕はね、あなたは何か新しい横光利一みたいな所があると思うね。感じ方とか才能の性質みたいなものがね、そんなふうに感じたね。あれはどうして終いに死のうと思ったの。

三島　あれはちょっと実録にとらわれたんです。実録は死のうと思って、薬を買ったり何かしたんです。小刀も刃渡り何寸ということも実録通り。……どうして死のうと思ったのかなあ。（笑）

小林　そりゃあ、死んじまえばよかったんだと思うけどね。あんた、死ぬまで書かなかったろう。どうして殺さなかったのかね、あの人を。

三島　はあ、小説で人を殺した経験はだいぶありますが、どうも人を殺すのはむつかしい。

小林　小説では簡単だよ。金閣寺を焼くくらい簡単だよ。

三島　生かすべき所で殺しちゃったり、殺すべき所で生かしちゃって、計画が齟齬したということがありますね。あれは殺しちゃったほうがよかったんですね。

小林　でも、あれは独白だからね、生きてなきゃ書けないような体裁になってるから、困っちゃったんだろうね。（笑）

三島　本人は今年の春、死んだんですよ。

小林　自殺したんですか。

三島　いえ、もともと、ちょっと胸が悪かったんですね。それが牢屋へ入ってから発見されたらしい。そうしてだんだん精神状態がおかしくなりましてね、自分の看護婦さんの荒川っていう人を、荒川観音といって拝んだり、マッカーサーを拝んだりして、自分の罪をゆるしてくれ、なんて言うんですね。病気が二つあるんで、分裂症には電気をかけるといいんですけども、電気療法をやると肺に悪いんですって。そうして気違いですからね、肺の療法として栄養をとらせようと思っても、栄養をとらないんで、両方だんだん悪くなっちゃって、病監へ入って、挙句の果てに仮釈放になって、今年の春、死んで……。でも、僕、人間がこれから生きようとするとき牢屋しかない、というのが、ちょっと狙いだったんです。ジャン・ジュネの小説なんか、牢屋の中だけで生きているでしょう。四十年か五十年生きるということは、牢屋の中にいるということですからね。いくら書いたって、ああいうやつには敵わないから、そこまでやめちゃったけど、死刑にはどうせならなかったでしょうしね、もし生きてたら、七十になっても、八十になっても、牢屋の中にいたかも知れない。

小林　……。

三島　小林さん、京都のお寺なんか、おとまりになりましたか。

小林　いいえ。

三島　僕、あれ調べるんで、初めて禅寺にとまったんです。金閣寺というのは、ものを書く人というのは、敷居をまたがせないんです、こわがって。もちろん金閣も入れませんけども、本堂のほうへも、絶対に入れてくれないんです。しようがないんで、すこし派がちがうんですけども、妙心寺へとまったんです。

小林　大体きみが書いてるような生活してる？

三島　ええ、ああいうふうですね。でも、禅寺っていうものは、全部日本のヤクザとか浪花節とかいうのの源になってるんじゃないかな。

小林　どうして。

三島　とてもヤクザ的になってるんですよ。たとえば旅僧が来て、その道場へ入れてくれっていうと、初めは入れてくれないで、庭詰めっていうのをやるんです。玄関の所に一晩くらいじっとして、待ってるんです。それからこんど旦過詰めっていうのがあって別の部屋でじっとしていて、食事だけくれるんですね。これ、ヤクザが旅人を入れる時だの、とめる時の作法と似てるんですね。非常にヤクザ的なんだ。どうも日本の軍隊から何から、みんな禅からきてるような気がする。最近、拳闘部の生活見てても、どうも禅寺みたいで……。(笑)

小林　関係あるかも知れないね。

三島　ええ、どこかでありそうな気がする。

小林　僕はヤクザっていうのは、『水滸伝』が源だと思ってたけど、それじゃ、ちがうかな。(笑)今の中共は知らないけども、中国には、インテリの中に『水滸伝』が生きてることは、たしかだな。これは生きてますよ。ああいう『水滸伝』なんかが徳川時代に入って、日本じゃ、とっても共鳴されて、はやったんじゃないかね。だから、ヤクザのああいうふうなものも、とても影響されてるんじゃないかっていうように考えたんだけどね、きみは今、禅だって言われるからね、そういうこともあるのかも知れない。そうかも知れない。あれはおかしいなあ、わからない。

三島　武田泰淳さんの『異形の者』という小説、お読みになりましたか。

小林　知りません。

三島　それは他力の道場の話なんですけれども、それはご本人が経験があるらしくて、うまいもんだな。

小林　他力って何んです。

三島　真宗でしょうね。

美の問題・フォームの追求

小林　真宗の坊さんの生活を書いたの。

三島　ええ、そうなんです。僕のとまった妙心寺の小僧さんの中に結婚に失敗しましてね、ノイローゼみたいになっちゃって、お寺へ来てるの、いましたけどね、みんなお父ちゃんて言ってるんです。お父ちゃんていうほど年取ってないんですけどね、そういう解決法が、まだ京都あたりにはあるんだな。東京じゃ考えられないでしょ。ノイローゼになったらお寺へいくなんて。京都じゃお寺へいくらしいんですよ。

小林　ふうん。

三島　さっき横光さんの話が出ましたけども、小林さんが、『機械』をお褒めになって、そのあとで、もうダメだ、とおっしゃったんで、横光さん、すっかりダメになっちゃ

ったんですってね。

小林 僕はダメだなんて言わない。ただね、あたしァ横光さんていう、人間が好きだったしね、立派な人なんでね、それが、あんな道をどんどんいくでしょ、あんまりつらい気がして、ついていけなくなっちゃったんだよ。ほんとはああいう才能じゃない才能が、そっちのほうへいっちゃうのが、僕はつらくってね、読んで行けなくなっちゃったんだ。それであのへんから読むの止めちゃった。だからあとは知りません、全然。今だに読まないしね、知らないんです。

三島 才能を思いちがいをしないで、一つ所をグルグルまわってるのは、気の毒じゃありませんか。

小林 思いちがいしないでって？

三島 たとえば、はっきり言っちゃえば、里見さんとか、永井荷風さんも、そういう傾向あると思うけど、ある所でキャッチした自分の才能の形を、こっちへいったら自分の才能に適さない、あっちへいったら適さない、だんだん狭くなりましょう？ そこだけでオートマチックに動いてる一生……。

小林 でも、それはオートマチックなことじゃないんじゃない？

三島 ええ、本人はね。

小林 うん、だって、ある型の中でいろいろこまかくなるからね。

三島 そのほうが幸福でしょうか、やっぱり。

小林 幸福とかなんとかいうことは言えないかも知れないけども。そのほうが表現力はたしかになるでしょう。

三島 そりゃそうですね。

小林 話はちがうけども、美の問題を、今の人はあんまり軽視してるね。僕は画のことなんか、ぐずぐず書いているのも、結局は、やっぱり近代の画家達が美の問題ばっかり追求してるでしょ。いろんなふうに追求してるでしょ。それでああいう革命、社会に対する反抗を起している、あの追求に興味をもつからだね。新しい技術とか、技法とかそういうものに対する非常に激しい要求、そういう運動はね、ほかの世界、特に、文学の世界になんかないんだよ。あそこだけが妥協してないんだ。文学のほうは、詩はいよいよ孤立して行く。散文の世界が非常に大きくなって、この世界が小説というふうなものになって繁栄する。現代の社会の常識に妥協してる事によって繁栄している。多少新しいことを言ったって、その時代のいわゆる新しい世論とか、新しい進歩的考えとか、そういう常識に常に妥協してるでしょ。画だけがまだ反抗しているのですよ。十九世紀のなかばから起った、あの実に激しい革命運動を受けつい

でいる。美という名に於ける反抗運動。これがたいへん面白いんだよ。で、僕はね、こういうふうな問題が、もっと大きな一般の問題に、どうしてならないんだろうっていう、そういうふうに思うのよ。

三島 実際そうだな。小説の場合は、やっぱり現象っていうものが、あんまり重くなるからでしょうか。

小林 それがね、僕にはよく解らないことなんだよ。考えていくとね、結局、ああいう美術家の考えているものは、フォームでしょ？

三島 ええ、フォームですね。

小林 フォームっていうものに絶対の価値をおく。フォームだけを求めている、ねらう所は新しいフォームなのよ。ところが、散文の世界だと、狙うものがフォームじゃなくなったから……。

三島 ええ、ええ。

小説家の眼

小林 だけども、フォームが全然なければ芸術じゃないからね、何かしらフォームには郷愁を感じてるんだけどね、そうじゃないもののほうが重要になって来てるね。フォームが、なくても真理でさえあればいい。対象のフォームを直覚するより、対象を批判した方がいい、美しいと言うよりほんとうだと言ったほうがいい。そういうことになった。そういう傾向が非常に強くなってるでしょ、片っ方で。僕は人間にそういう二つの認識の傾向があるんじゃないかと思うのよ。ものの認識の方法に二つある。それがいつの歴史だって、争っているのじゃないの。小説の世界っていうのは、いつでもフォームをこわすほうの世界でしょ、そういう認識力が支配的な世界だ。フォームを否定する科学のメトードに歩調を合した世界に、現代人は馴れきっている。だから、美術の理解というものは教養の一つとして、みんなもちたがるんだけどね、しかし、絵画の世界というものが、実は現代的教養に対する大きな抵抗力として存在するという意識はないのだよ。

三島 たとえば、ここにエビがいる。（卓上の皿を指さして）このエビがこういうふうに見えているのは、ほんとのエビじゃない、という考え方が出てきたのは、いつからでしょう。

小林 リアリズム？

三島 ええ、まあ。印象派から出てきたんでしょうか。

小林 無論、印象派よ。

三島 小説家のほうのそういう印象派時代というもの……。おれが見てるエビは、ほんとのエビじゃない、という考え方を、小説家がもつようになったのは……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com